

篠山・春日神社祭礼を担う子どもたち —その現状と課題—

神原 文子¹⁾

要 約

兵庫県篠山市の城下町にある黒岡春日神社の秋祭りは、300年以上前から毎年10月に、氏子である地元住民の力によって執り行われてきた。鉾山、金神輿、太鼓神輿などが有形文化財として保存され、継承されてきた。とはいえ、氏子の方々が、日々の暮らしを支えながら、祭礼をどのように存続させ、継承されてきたのかという点については、従来、記録が保存されているわけではなく、なんらかの調査研究もされてこなかった。

本稿では、魚屋町、上二階町、下二階町において、祭りを担ってこられた方々、今も現役で担っておられる方々へのインタビューをふまえて、春日神社の祭りにおける、とりわけ、子どもたちの役割に焦点を当てながら、祭りの継承・存続に関わる課題について考察した。

祭り文化の中で、子どもたちが確実に育っている実態を捉えることができたが、矛盾するようになり、大学進学した子どもたちが、地元に戻ってくるのが難しい現実も浮かび上がった。

1. 問題意識

兵庫県篠山市の城下町にある黒岡春日神社の秋祭りは、300年以上前から、毎年10月に氏子である地元住民の力によって執り行われてきた。今日では、16町の氏子の方々によって、9基の鉾山、8基の太鼓神輿、4基の金神輿の巡行が行われている。

実は、筆者は、たまたま、ご縁があって、2016年度から、学生たちと一緒に春日神社の祭礼を担う3町に関わらせていただくことになり、祭りの世話役の方々にお話を聴かせていただくなかで、祭礼の存続を可能にしてきた諸条件が、そして、先細りしていく状況が見えてきた。

鉾山、金神輿、太鼓神輿などが有形文化財として保存され、継承されてきたが、氏子の方々が、日々の暮らしを支えながら、祭礼をどのように存続させ、継承されてきたのかという点については、従来、記録が保存されているわけではなく、なんらかの調査研究がされてきたわけでもないこともわかってきた。

本稿では、地元に関わらせていただきながら、祭りを担ってこられた方々、担っておられる方々へのインタビューをふまえて、とりわけ、春日神社の祭りにおける子どもたちの役割に焦点を当てながら、祭りの継承・存続に関わる課題について考察したい。

¹⁾ 神戸学院大学現代社会学部現代社会学科

子どもの役割に焦点を当てるのは、当地の祭りでは、子どもたちが重要な役割を担っており、少子化の中、子どもが今以上に減少すれば、現行の祭りのスタイルを継承できなくなるのではという危惧もあるが、子どもたちが祭りの重要な役割を担うことで、地域住民と地域文化によって子どもたちが育てられるという、祭りを通した子どもの社会化の機能を確認したいゆえである。

2. 先行研究

文化人類学や民俗学のみならず、この30年ほどの間に、全国各地の祭りを事例とした社会学的な研究の蓄積がずいぶんとなされている。たとえば、古くは、有末賢が、都市祭礼を担う地域組織に関する研究において、東京の佃・月島の祭祀を事例に、伝統的な講組織の地縁性とアイデンティティの存在、および、より広域組織の多様性からなる重層構造を明らかにしている(有末, 1983)。小松秀雄は、阪神淡路大震災直後の神戸の生田神社・三宮神社の祭りについて、祭りの実践のもつ地域住民における意義や担い手たちにとっての意義を考察している(小松, 1995)。各地で執り行われている祭りを事例に、都市祭礼の歴史の変遷、とりわけ、担い手や組織の変容に関する事例研究では、祭りの存続における「近代化」がテーマとなっている(鈴木, 2011; 深澤, 2011)。田中滋らは、カイヨワの祭り論を参考に、曳山祭を事例として、さまざまな社会変動を縦軸に、祭りにおける「脱宗教化」、「過剰としての放埒」、「祭りのオーソプラクシー化(実践に忠実であること)」というキーワードを横軸にして祭りの盛衰について考察する(田中・吉田, 2011)。また、野中亮は、堺市鳳だんじり祭りを事例に、複数の祭りの関係性を文化圏の視点で考察し、だんじり文化圏の中で人の交流について検討している(野中, 2010)。

さらに、竹元秀樹は、出身地である宮崎県都城市における各地の祭りを事例に、都市の歴史の変遷と祭りの存続と変容との関連について、歴史的資料、官庁統計、フィールドワークによって蓄積されたデータをもとに多角的な視点でまとめている(竹元, 2014)。

まだまだ検討しきれていない文献は少なくないが、竹元の研究のごく一部を除いて、日々の暮らしを営みながら祭りに関わっている人々の姿が見えてこない。生活が見えない。各地で、祭りを担っている人々は、日々の生活と祭りへの関わりをどのように“両立”させ、“折り合い”をつけているのか、見えてこない。ましてや、子どもたちは祭りにどのように関わっているのだろうかという点については、従来、ほとんど考察されていないのである。竹元によると、都城市の「おかげ祭り」に子どものお囃子があるとのことであるが(竹元, 2014)、子どもたちが祭りにかかわりながら、地元でどのように育っているのかといった点までは触れられていない。学校生活と祭りへの参加はどのように調整されているのだろうかといった点も気になるところである。

3. 実査概要

春日神社の祭礼における鉾山は、上河原町、下河原町、上立町、下立町、呉服町、上二階町、下二階町、魚屋町、西町の9町が1基ずつ所有している。また、新町も加わって11町で7基の太鼓神輿を運行する。9町のうち、魚屋町、下二階町、上二階町でのインタビューをふまえて考察する。

表1

氏名	調査日	性別	年齢
Hさん	2016年9月19日	男性	62歳
F子さん	2017年10月15日	女性	25歳
T Kさん	2017年12月2日	男性	73歳
Oさん	2017年12月3日	男性	58歳
Kさん	2017年12月3日	男性	60歳
YFさん	2017年12月3日	男性	68歳
E子さん	2018年2月24日	女性	83歳

インタビューをさせていただいた方々のなかで、本稿で取り上げさせていただくのは、表1の方々である。インタビューでは、生い立ち、祭りへの関わり、祭りへの思い、祭りの将来展望など、自由にお話いただいた。

4. 祭りに関わる子どもたち

4.1 春日神社の氏子としての子どもたち

その町で生まれた子どもは、お宮参りによって春日神社の氏子の仲間入りをし、さらに、祭礼の本宮の折に、その1年間に生まれた子どもたちが、両親に抱かれ、お祓いを受け、行列に連なって町を練り歩くことになり、いわば、地域へのお披露目がされる。そして、物心ついた頃より、春日神社の祭礼に関わることになる。

Oさん： もともとここらの子どもは、生まれたときから春日神社とお祭りに縁のある者ばかりでして、生まれてから1カ月で、だいたい春日神社に行って、お宮参りさせていただいて、10月のお祭りから来年の10月のお祭りのあいだにお宮参りをすませた子どもが、春日神社の本宮の時点で、お父さん、お母さんに連れられて、抱っこされて、本宮に上がって、御祓いを受けて、そのあと・・・、今年はちょっと雨のせいで、回ることができませんでしたが、稚児行列と言って、抱いてもらって回るようなことがあるんです。そやから、生まれて1歳か2歳にならないうちから関わりというのが深くなっています。あと、1歳2歳になると、とりあえずはすることはないんですけども、3歳4歳5歳となっていくと、鉾山の下に板場のところがあるんですが、あそこに乗って、お父さんお母さんが引っ張っているのを見てみたり、幼稚園ぐらいになると、今度は囃子の練習して行って、幼稚園、小学校1年2年3年は鉦、4年5年6年は笛、6年生のうちの一人が太鼓を叩くというようなことになっています。

4.2 お囃子の練習

自治会長のHさんの話によると、1つの鉾山に、笛8名、鉦5名、太鼓1名=合計14名くらいの子どもが必要となる。昔は男の子だけで、小学3年生までは鉦、小学4年生から6年生までは笛、6年生の1人が太鼓となる。

お囃子は、それぞれの町によって異なっているそうである。また、本囃子、中囃子、戻り囃子と、基本的に3種類あるという。地元の子どもたちは、3、4歳の頃から鉾山に載せてもらって、お囃子を聴き、5、6歳くらいから、「いや方」という、声を出す役を担い、小学生になると、鉦、笛、太鼓などを習得していくことになる。

Oさん： 昔は、毎日、30分から1時間、練習。今よりはずっとうまかったし、教えに来てくれている人はわりと怖い人が多くて、昔のことだから、殴るみたいなこともあったし。

聞き手： 毎日、練習というのは、子どもにとっては厳しいですね。

Oさん： 昔は、行くたびに10円だか30円だか、おやつ代というのが出たし、駄菓子屋さんに行ったらお菓子を一つもらって帰る。お金は町から後で払うというような形を取っていた。そのお菓子欲しさに、結構、行っていた子が多かったです。今は、週に3回か4回だけ

1時間の練習で、おやつは週に1回出るようにしています。

Oさん：幼稚園から小学校6年くらいまでずうっと、7年ぐらい、同じお囃子を聞きながら、鉦、笛、太鼓とか練習して、身に染みついて行きますよね、お囃子が。練習も、前に節だけ書いたものがあるって、それを声を出しながら、鉦を叩いたり笛を吹いたり練習をしているもので、そのリズムというか、節が入ったような感じで、しばらく離れてても、笛の音が出るかどうかは別にして、吹けんことはないよ。

お囃子の練習も、町、町によって違うようであり、また、その時々によっても異なるようである。練習の仕方について、TKさんは、次のように語ってくださった。

聞き手：お囃子にせよ、先輩が下の子どもさんを教えるだけじゃなしに、昔からの、そういうことをものすごくよくご存知の方が、それこそ世話役として子どもたちを教えるということが、ずっと続いてきたということですね。

TKさん：町によっては、一人の重鎮というか、かなり祭りの好きな人がいて、その人が子どもたちに教えていたという町もあったんです。うちの町は、最近では、平成7年度ぐらいからは、役員が子どもたちの囃子の練習を指導する立場になった。それまでは、子ども同士で練習していたと思います。というのは、子どもが少なくなってきたら、どうしても中心になる者が少なくなる。6年生、上級生がおって初めて下級生に教えることができる。その中間がいなくなったり、上の者がいなくなったりしてくると、教える者がいなくなる。そうやってきた場合に、町の役員なり、われわれ昔の者が教えていかな仕方がないということで。だから、平成7年に、氏子総代という立場上、2年か3年ほど、子どもたちに教えましたけれど。

聞き手：その祭りの囃子とか、たんに囃子だけのやり方じゃなくて、躰のこととか、そういうことがずっと伝えられていって、そのことが子どもたちが育っていくうえで、ものすごく重要な意味を持っていたのではないかという思いがすごくあって。それは家庭で親御さんが教えられることと、学校で教えられることと全然違うことが、町の文化を伝承するなかで、子どもたちが身につけていくということが、それがものすごく大事な、大きな意味を持っていたのではないかと思うんですけども。

TKさん：教えることについては、子どもたちには、ある程度、祭りというのは神事だということ、だから、いい加減な練習はイカンと。ボクが勝手に「心得」というのを作ったんです。それを祭りの始まる前に、祭りの練習は正座に始まり、正座に終わるということを念頭に置いて、それから祭りの練習のときは私語は謹んで、練習に没頭するというか、励む。練習時間は1時間やけども、中休みというのがあります。そのときは楽にして休んでいいけど、練習するときは練習に没頭してやりなさいということ、そういう躰をしたつもりなんやけども。そやなかったら、ええ加減な練習では練習にならないし。これは遊び事じゃないから。そういうことを徹底させないと。家だったらいいけど、ここではここの、練習するところは練習する場だから、それに没頭するような練習をしないとイカンということ。

ボクらが小さいときは、そういうことを先輩から教えられてきたから。正座するとき

は、胡坐をかかずに、こんな姿勢で。精神を統一しなかったら、十分練習に没頭できないということで、精神統一のための正座、目をつぶって正座をして、それも1分か2分かさせられたことがあります。ちょっとでもよそ見したりしたらイカンということ子どもの時分にはありました。最近、そこまではありませんけども。だけど、正座をしないと心を静めることはできない。練習に身が入らないということがあって、そういうことは心得として言っています。

子どもたちは、祭りは神事であるということ、正座をして、精神を統一して練習しなければならないということを、地域の指導者や先輩から教えられるのである。

聞き手： 鉦に乗っている子どもさんが、まだ小さい子どもさんが、一生懸命、声を出して、それがものすごくいいことやなあと思ひまして。

TKさん： ボクらは小さい時分から言われまして、いや方の役はそれやからね。声が枯れるくらい出さないとイカンと。それこそ、祭りの本番でこそ、そうせなイカンのやけども、それは普段の練習のときからも恥ずかしがらずに、大きな声で・・・。「いや方」と言うんですけど。それが仕事やからということで。できるだけ大きな声で。そしたら、鉦を叩く者も、笛を吹く者も一生懸命になりますのでね。そういうこともあって、声掛けは大事なことだと思ひてやっています。一生懸命しようと思ひたら、鉦を叩く者も一生懸命になる、笛を吹く者も一生懸命になる、ということでもいい結果になる。

聞き手： そのことが祭りで指導を受けて、本番で、実際にやって、それこそ多くの人に見てもらってということが、子どもさんが育つなかで、それがすごく誇りになるんじゃないかと思ひますね。

TKさん： 子どもが1年生・・・、幼稚園ぐらいから乗せているんですね。練習させているんです。今の子どもは覚えるのが早い。きょうだいがいたら上の者が、兄が弟に教えるとかね、家の中でもそういうことがあるから、弟も、お兄ちゃんに負けないように練習せなイカンな、覚えなイカンなという気になる。最近、そういうことで、練習するにしても、すぐに馴染んできますね。覚えてきますね。囃子の歌詞でも、まだ幼稚園の子どもでも、もう覚えたんかって言うて。

聞き手： そのことが子どもさん自身の、たとえば、学校の勉強とか、勉強以外のスポーツでも頑張るということに関係しているんじゃないかと思ひますね。もう一つは、町々で、祭りの中で、年齢を越えて、教えてもらったりとか、それから、地元の役員の方が中心に子どもたちが指導を受けたりとか、というなかで、町の中で、みんなが顔を知っていると、子どもたちが地域のおじさん、おばさんにみんな覚えてもらっているということが、ある面、子どもたちにとっては、悪いことができないとかね、見守られているし、それは子どもの育ちにとっては、ものすごくいい環境やなあと思ひますね。

TKさん： 町の中で、親とか年寄り連中も、自分たちの子ども以上に、親しみを持つということは、何かにつけて、町に良いほうに向いていくと思うんです。だから、祭りでも練習というのは確かにきつい時もあるかもしれないけれども、それを乗り越えることによって、町への何らかの形で、自分たちも参加できていることを誇りに思ひていると思う

し、他の住民も、子どもたちを見守っているわけですね。だから、いろんな面で、いい面ばかり出てきていると思うんです。町を良くしようと思ったら、お互いのきずなというのは大事なことになるので、その一環でもあるんじゃないかと思うんですね、祭りというのはね。

3、4歳の頃から、祭りの折に鉾山に乗り、毎年、祭りが近づくと、毎日のように子どもたちが集められて、地元の指導者や年上の子どもたちから、声かけ、鉦、笛、太鼓のお囃子を教えてもらい、やがて、自分たちも教える側に育っていく。氏子であれば、おおよそだれもお囃子を知っていて、鉦の叩き方、笛の吹き方を知っている。一家の中では、何代も続いていて、子どもにとっては、祖父も父親も、きょうだいも、みんなが経験していることになる。お囃子に関しては、祖父や父親が子どもに教えることができるわけである。実際には難しいようではあるが、

地域ぐるみ、家ぐるみの祭り文化の継承であり、社会化である。

聞き手：祭りの文化が、世代を越えて、しかも子ども時代の早い段階で伝えられていって、また、その子どもたちが大人になってまた次に伝えていく・・・

YFさん：いま教えているのは・・・、昔は専門のおっちゃんがいてたんですが、その方が亡くなって、さて、どうしよう、誰かが教えないといけないということになったんですけども、だけど、毎日も教えられないということで、親たちも自分たちは教えてもらっていたんだから、親たちが交代で教えようかということで、いま、子どもたちの親が教えています。

聞き手：じゃあ、親御さんにとってもいい学びですよ。教えるって難しいですもんね。

YFさん：難しいと思いますよ。

全国各地の祭礼で鉾山や山車を巡行するところは珍しくない。しかし、地元の子どものみでお囃子の役を担っているところがどれほどあるか、定かではない。

春日神社の祭礼で、いつ頃から鉾山に子どもたちが乗るようになったのか確認できていないが、非常に重要な意味があると察せられる。

4.3 鉾山の乗り子としての経験

F子さん(25歳)が、鉾山の乗り子になった経験を次のように語ってくださった。

聞き手：F子さんが、最初に祭りの鉾山を経験されたのは何歳のときですか？

F子さん：たぶん3歳ぐらいのときだと思います。最初は、楽器を演奏する係には選ばれなくて、鉾山も見ただけならわかるかもしれませんが、後ろにタペストリーが掛かっている所がありますが、そこに子どもが座って乗れるようになっていて、おうちの人が曳いたり、お兄ちゃんお姉ちゃんが乗っている所に、まだ就学していない小さな子どもがそこに乗って一緒に運んでもらうんですね。なので、最初はそれに乗っていたかなと思います。

聞き手：もともとは鉾に乗るのは男の子ばかりだったのが、だんだん男の子も人数が少なくなっ

てきて、女の子もある時期から乗るようになったというふうには伺っているんですが、ですから、女の子が乗るときも、着物は男の子の・・・

F子さん：そうですね。緋の緋の着物に、青っぽい帯で、全然華やかではないですね。

TKさんやOさんたちの子どもの頃は、地元の篠山小学校の児童数が多く、各町の氏子であっても、宵宮と本宮と2日間とも鉦山に乗ることができなかったという時代もあったと聞く。かつては、幼児が、鉦山の下に乗って、いや方を務めていた時期もあったそうである。しかし、少子化が進む中で、地元の子どもの数がどんどん減って、どの町も子どもを確保することに苦労するようになり、今は、鉦をたたく子どもたちが、いや方も務めているという。

春日神社の氏子ではあっても、鉦山のない町にも声をかけ、幼稚園児、さらには3歳の幼児も参加したりしている。また、男児だけでは足りないために、10年以上も前から、女兒が男児用の緋の着物と兵児帯の装いで鉦山に乗るようになった。さらに、地元の子どもだけではなく、嫁入りして篠山を出て行った娘の子どもたちが参加することもあるという。

聞き手：鉦を叩くとか、笛を吹くというのは、どういうふうに覚えていくんですか？

F子さん：9月に入ったら、うちの町はお祭りの練習が毎日夜の7時から1時間あって、みんな公民館に集まるんですけども、そのときに、前に譜(面)のようなものが貼られているんです。それも、音符が書いてあるわけじゃなくて、平仮名で、たとえば、チー、チ、チ、チリガ、ツー、チー、チデもって、ツテツテ、チンチリが・・・っていうふうには、言葉が書かれてあって、それを見ながらみんなそれに合わせて叩いていくんですけど、ずうーっと就学前から練習には一緒に参加させてもらって、後ろで聞いていたり、寝ていたり、バチをもって床を叩いたりとか、練習をしているので・・・

聞き手：耳で覚える？

F子さん：そうですね、耳で覚えているので、私たちの、この地域の人たちは、チーチーチリガツ・・・って書いてあっても、♪チーチー・・・なんやなっていうような・・・。(笑)言葉を見ただけで、メロディが出てきますね。刷り込まれていると思います。

F子さん：練習は、一応、子ども会が中心になってやっていたと思いますが、それぞれのおうちの保護者の方が来られて、とくにお父さんたちが、昔、自分たちが乗り子をされていたりとか、自分たちが練習をされていたこともあって、一人ずつ順番に来られていました。あとは、地域のお年を召した高齢の方が、笛の名人のおじいさんとか、太鼓がすごく上手な地域の方が来てくださって教えてくださいましたね。

聞き手：結構、厳しかったですか？

F子さん：私たちの時代は、みなさん、マイルドになられて、優しく教えてくださっていましたけども、やっぱり、行儀が悪かったり、正座をして1時間練習をしているんですけども、足がしびれて、足がダラーンとなっていたりとかしたら、怒られたりしましたが、父の世代のときはもっともっと厳しくて、足が崩れていれば、パシーンと叩かれたり、厳しく躰をされたこともあったみたいです。

聞き手：笛は、最初、音が出ませんよね。

F子さん：でも、そんなにすごく手こずった覚えはなくて、たぶん、聞いているうちになんとなく

聞き慣れていて、指も動かすのが、左手が前で右手が後ろで、こういうかたちで構えているんですけども、中指を上げるか、全部上げるか、左手の薬指を上げるか、いくつかの音があるんですけども、ずっとそれを聞いて過ごしているの、この音がこれとか意識しなくても、聞いていたら、いつのまにか吹けるようになっていましたね。ただ、うちの人の中でも、すごく、どここのお父さんは笛がとても上手というおうちがあって、私も、幼なじみが同級生でいたんですけども、そこはお父さんがすごく笛が上手で、その子もやっぱりすごい笛が上手で、「あそこのおうちは、笛が上手なおうちやな」とか言いながら。

4.4 太鼓神輿の乗り子の経験

F子さんの場合、鉾山のお囃子に参加しただけではなく、太鼓神輿の乗り子にもなったというのである。1基の太鼓神輿には、小学4年までの子どもが3、4人乗ることになっている。F子さんは、太鼓神輿の乗り子になった時の様子を、やや誇らしげに、次のように語ってくださった。

F子さん：15年ぐらい前からですかね、私が小学校の頃は、鉾山自体は男の子も女の子もみんな乗っていたんですけど、夜に出るお神輿のほうは、うちの町の場合には人数が少ないので、私も女の子だけでも乗れたんですが、人数が多い町では女の子は乗れないところもあったりしました。今はもう、そういうのは全部解消されているとは思いますが。

聞き手：神輿のほうは、男の子が白い化粧をして、口紅も引いて、いわゆる女の子のような恰好をして乗りますよね。

F子さん：お化粧をしてもらってね。神輿に乗っている期間は神聖な期間で、巫女みたいな扱いというか、乗り子はすごく神聖な存在というふうになっているので、私も乗らしてもらったときは、その期間は土足で地面を歩いてはいけないんですね。なので、移動するときには、いつも大人の方に肩車をしてもらって、家のここは歩いてもいいけれど、家から一歩出るときは、必ず誰かがお迎えに来て、肩車をしてもらって、足が地面につかないように運んでもらったりしていましたね。お手洗いに連れて行ってもらうときにも、移動はいつも肩車で連れて行ってもらっていましたね。地域の美容院でセットをもらうんですけども、美容院でセットしてもらって着付けが終わった時点から、私のときは祖父がお迎えに来てくれて、おんぶをして家に戻りました。

YFさんは、娘さんが神輿に乗ることになった状況について、次のように語ってくださった。

YFさん：鉾山にしても太鼓神輿にしても、男の子しかなれなかったですね、ずうっと。子どもが少なくなってきたので、それで女の子をと。たぶん、この町、呉服町、上二階町、下二階町が一つの太鼓神輿ですけども、そのときに、なんとか女の子を乗せたいからということで、うちの2番目の子やったかな、ご指名があって、本人は嫌だったんですけどもね、初めてやし、他の人に頼めないし、乗り一や、言うたのは初めてで。ただ、そのときは、昭和天皇が亡くなられて、鉾山は運行するけども、太鼓神輿が中止になったのかな・・・、定かではないんですけど、それで、乗れなかったんですね。本人は乗らなくて良

かったと思っているかも知りません。ただ、うちのお姉ちゃんなんかは、乗りたかったって、いまだに言いますよ。その頃はまだ乗れる状態じゃなかったん。三番目の妹が、初めて乗ったんです。

聞き手： YFさんは、娘さんが・・・

YFさん： 三人。三人とも銚山に乗っています。乗れる時代になっていましたから。太鼓も、笛も吹いていましたね。

太鼓神輿の乗り子は、地元の3、4年生の中でも1人であり、選ばれた存在と言える。しかも、神聖な役であり、特別の待遇を受けることになる。

とはいえ、太鼓神輿は、総勢40人ほどの男性が担いで、乗り子が太鼓を叩くが、平穩に巡行するだけではなく、みんながかけ声をかけながら上げ下げしたり、他の神輿と競り合ったりと、結構、激しい動きをするので、乗り子は怖い思いもするという。しかし、F子さんの場合は、怖さを楽しみながら、誇らしさを実感した模様である。

今日、乗り子は、女も男も関係なくなっているというのは、子ども数の減少ゆえの窮余の策から発したとはいえ、時代の動向に合致していると言えるだろう。

ところで、太鼓神輿のある町では、太鼓神輿の乗り子を1人、確保しなければならない。乗り子は、太鼓神輿1基に3人程度であるが、各町で少なくとも1人の乗り子を出すことになっている。

おおよそ3年生か4年生までの男児、または、女児が、白塗りの化粧、女児用の着物を着付けてもらうが、化粧と着付けが仕上がると、神聖な立場となり、自分の足で歩いてはいけなくなって、だれか男性に肩車をしてもらって移動することになる。

乗り子を出す家では、年によっては、乗り子の衣装を新調したり、神輿の担ぎ手のための出発前の集まり、“出会い”のための食事を用意したり、という役を引き受ける。1回で、30万円から50万円くらいの出費になるという。

乗り子の確保については、苦勞が絶えないようである。自治会長の経験のあるYFさんから、次のような話をうかがった。

YFさん： じつは、下二階町の子ども数が少なくなって、存亡の危機やなということで、男の子が最悪一人になってしまうかなという・・・。なんとかせなイカンということで、私の所にも借家が一軒ありましたから、そこが空いていたので、できたら、子どもがいる夫婦がいいよねって話をしていたら、幸い見つかりまして、その来てくれている人は(子どもを)篠山小学校に通わせたい、お祭りに参加させたい、というのが希望だったんです。こっちは、願ったり叶ったりで、その人が来てくれたおかげで、またその次の別の家族にもつながっていくんですけども。

4.5 祭り文化の中で子どもが育つということ

F子さんは、最後に、ご自身にとっての祭りの意味を、次のように語ってくださった。

F子さん： お祭りはいくつになってもわくわくしますし、こういう地域の誇りになるようなものがあるというのは、自分の中でもすごくうれしいです。だから、友だちが来てくれたりす

ると、一緒に見にいこうかって言って、行けたりするのもすごくうれしいです。あとは、小さい頃から、普通にしていたことですが、笛が吹けるとか、太鼓が叩けるとか、そういうことを今まで全然意識していなかったんですけど、みんなに聞くと、「横笛、吹けるの？」って言われたりしたことがあって、これって特別なことなんだなあと思ったり・・・

聞き手：それから、下二階の地元の方が、お祭りの中で関わることで、みなさん、顔見知りになったりとか、みんな、知り合いになれますね。

F子さん：そうですね。私がすごくビックリしたのが、中学校から、篠山の学校じゃなくて一貫校の私立の女子高に行ったんですけども、そのときに、阪神間の友だちを連れて篠山の家遊びに行ったときに、私が歩いていると、商店街のお店のおばちゃんたちが、「F子ちゃん、元気？」とか「大きくなったねえー」とか、八百屋さんが「これ、持っていきな」とか声を掛けてくれるんです。そうすると、豊中に住んでいる友だちとか、西宮に住んでいる友だちが、「なんで、みんな、こんなに声をかけてくれるの？」ってビックリして、「あたりまえやん。おんなじ町の人やで」って言ったら、みんなは「私ら、そんなないわー」って言ったので、そういうものなんやなあって思って、そのときはすごくビックリしました。自分が大学のときに一人暮らしをしたときには、学生用のアパートに住んでいたんですけど、全然、地域の人たちとのつながりがなくて、6年間、住んでいたんですけど・・・

F子さん：同じ世代の子ども同士もそうですし、もっと上のおじいちゃん世代の地域の方とか、お父さん世代の地域の方とか、いろんな人とつながりを持てるというのが、すごく大きいと思います。今でも、この祭りのために帰ってくる同級生だったり、年上の先輩がいて、太鼓神輿を担っているのを見ると、「あ、ひさしぶりー」とか言って、その時に交わす言葉は一言二言だけなんですけど、あー、みんな、帰ってきたんやなーっていうので・・・

地元の篠山小学校へは16町から子どもたちが通っているが、鉾山を持っているのは9町だけであり、それら9町の子どもたちにとって、祭りで鉾山に乗れることは、誇りであったようである。昔、祭りが16日、17日に行われていた頃は、鉾山に乗る子どもたちは、学校に行って、1時間目だけ授業を受けて、帰ることが認められていたという。

また、Fさんの語りにあるように、笛を吹くことができる、太鼓を叩くことができるということが、地元では当たり前のことであっても、他地域に行くと、そのことが特別のことであると気づかされ、誇りになっているという。このような自己肯定感の形成も、祭りの意義であると気づかされる。

さらに、祭りが近づくとわくわくするし、地元を離れている同世代の仲間が祭りの時は戻ってきて懐かしく思ったりするなど、地元への愛着心が育まれていることも押さえておきたい。

お囃子の練習が、自己肯定感の形成につながったり、子どもたちの間に仲間意識が生まれたり、地元の方々に名前も顔も覚えてもらって、折に触れて、支えられ、見守られながら育つことができたり、そして、地元への愛着心や誇りを育んだり、その意義は計り知れない。お囃子の練習は、お囃子の技法を習得するだけではなく、正座すること、私語をしないで集中すること、大きな声を出すことなども教えられることも、子どもの育ちにおける影響として無視できない。

ただし、子どもたちが地域の住民の方々に、日常的に見守られているということは、監視されているように受け取られる面もあり、窮屈感も否めないが。

5. 地域における教育重視の文化と祭りの継承と

5.1 篠山市街地における伝統的な教育重視

TKさんは、1989年くらいから、総代などの役を担った時は、ようやく普及し始めたPCを使って資料をひとりで作成し、全部、保存してこられたという。

TKさんの話を伺いながら感心したのは、篠山の城下町に限らないかもしれないが、住民の方々が学問や文化を伝統的に大事にする風土があって、知的レベルが高い点である。TKさん(73歳)は、PCで祭りに関する資料を作成する作業について、「こんなできます」と、さらっと話しておられたが、非常に高度な知的な作業であることは、一目瞭然であった。

1980年代に、教育社会学者の天野郁夫が研究代表者となって、丹波篠山における学歴主義の歴史的考察を行って研究成果をまとめているが、篠山城下町の士族のみならず、商家においても、大正末期から昭和にかけて、家業による経済力を背景に、跡取りでも中等教育、高等教育に進学し、階層的地位を高めていったという(天野, 1991)。

篠山地域に特徴的な傾向なのかどうか定かではないが、地元、篠山の市街地においては、戦前から商家の子どもたちが、当時としては高い教育を身につけるといって教育重視の文化が伝統的に受け継がれてきたことは確かであろう。

話を伺った方々も、その子どもさんも、性別に関わりなく、全員、大学へ進学されている。

旧篠山町は、昔から教育に力を入れてきた土地柄であったようである。明治8年(1875年)、旧篠山藩主直系青山忠誠が、国家有用の人材を養成するため、郷里の優秀な子弟を赤坂の自邸に起居させ、勉強させるようになり、やがて、上京する郷里の男子学生のために尚志館という学生寮を建てたことも無関係ではない。

TKさんによると、地元から通えるところに大学があったことも関連するという。

聞き手： みなさん、結構、大学を出ていますよね。TKさんの世代で、全国で言えば、大学を出ているのは10数パーセントなんですよ。でも、篠山の、特にこの城下町のところは結構大学を出られていますよね。

TKさん： もともと、ここに兵庫医科大学がありましたね。

聞き手： それと農学部があったんですね。

TKさん： だから、地元でこの大学に行っている者も同級生でもかなりいました。自分のところから学校に通えますよね。そういう便利さがあった。昭和42年に神戸大学に移管しましたが、昔は、明治時代から70連隊があった。その連隊のあとに、兵庫農科大学ができた。それから42年に、ボクらが卒業する年代の者が、神戸大学を卒業した。だから、その時分は、学生が多かったから、パチンコ屋がたくさんあったんです。篠山には、その頃は学生も賑やかにやってきました。そんな時代が懐かしいなあと思います。

聞き手： 大学生という人が身近にいた？

TKさん： いた。42年までは。

聞き手： それと、商売をしているところは、景気のいい時代は、お子さんを大学に行かせる余裕

があったということがありますよね。だから、大学に行くだけ行って、帰ってきたら・・・、みたいな。

TKさん：そうですね。だから、ボクらも、そういうことで行かせてもらったというところがありますね。いまでこそ、誰でも大学に行きますけども、うちの頃は、高校で、4分の1ぐらいは大学に行っていました。普通高校やから、商業科、家庭科、普通科とありましたからね。だから、高校は400人いたんですけども、そのうちの、2学級は進学クラスやったから、80人ほどかな。

地元で大学があること、身近に大学生がいたこと、また、自営業主が多く、ある程度、経済的に余裕のある世帯が多かったことから、早い時期から大学進学率が高かったことが窺える。

しかも、篠山市内にある進学校の兵庫県立泡鳴高校から東京の大学への進学については、尚志館という、元青山藩が建てた学生寮の存在も進学を後押ししたと解される。

大学進学は男子だけではなく、女子も同様である。F子さんもそのひとりである。

F子さんは、現在、隣接市の小学校教師をしており、自宅から通勤している。

F子さん：先生になろうと思ったのは、小さい頃ではないです。小さいころは薬剤師さんになろうとずっと思っていて、でも、あまりにも数学ができなくて、高校の途中で、ちょっと理系は無理だと思って諦めました。もう一ついいなあと思っていた仕事で、先生はどうかかなあと思って、やり始めたんですけど。うちは、父が昔から、「資格を持たないとアカンで」っていうのはずっと聞いていたので、何か資格の取れる仕事はないかなあど。女の人でもずっと一生を通して働ける仕事はないかなあどって考えていて、それが昔は薬剤師だったんですが、それから教員に変わったんですけど。篠山の教育のことは、あんまり詳しくはないですけど、昔、城下町で、藩校があったり、ずっと昔は、神戸大学の医学部が篠山にキャンパスがあったみたいです。そういう人たちを見られて、祖父とか祖母の代が、大学はいいなあとか、学生さんはいいなあとか、資格を取って働くのはいいいなあって思っていたんじゃないかなあって思います。

5.2 祭りの役割と学校での勉強と

それでは、教育重視の地元において、祭りへの参加と勉強とをどのように折り合いがつけられてきたのだろうか？ 3人の息子さんを育てたというE子さんにお話を伺った。

聞き手：子どもさんが小さい時は、祭りの1カ月前ぐらいから、練習があったり・・・。

E子さん：練習、毎日行きますね、毎晩。体育祭がすんだ次の日から。一服して、次から。必ず。運動会がすんで、次からお稽古、行っていました。

聞き手：そしたらその時間に合わせて、たとえば夕飯の支度をしてとか。

E子さん：そんな無茶苦茶。うち、商売人やから、私ら、無茶苦茶しましたけども。皆さんは、食べて行ってでしょ、今の時代やから。うちの子は、放つたらかして。今みたいに、静かな店やないから、勝手にそれぞれ行っていました。なんと食べて。

聞き手：だんだん子どもさん、大きくなっていかれると、学校の勉強もあるしとか、塾に行った

りとか・・・

E子さん：あの時分は、塾に行ってませんよ。今の子は、塾に行かないイカンので大変ですね。でも、お祭りの稽古だけはちゃんと行ってましたよ。

聞き手：その当時は、毎日練習をしてましたか？

E子さん：今でも、毎日ですよ。日曜日だけ休みですね、いま。

聞き手：ほかの方に何うと、塾に行かないかんし、祭りの稽古もあるし。

E子さん：私はね、塾なんてほおっておいて行ったらええと思います。10日間だけです。そんな時に勉強できないのはウソです、と思います。皆さん、今の子はジユクジユクって言われますけど、塾は何のために行くかね、よう考えて、うちは行かせていませんけど。

Eさんの息子さんたちはいずれも国立大学へ進学されたという。学生の頃は、祭りに戻ってきていたが、就職をして、家庭を持ち、会社での地位も上がると、祭りだからといって、地元に戻ってくるのは難しいそうである。

6. むすびにかえて一篠山における教育重視と春日神社祭礼の存続・継承と

篠山における伝統的な教育重視と、若者の地元離れと密接に関連しており、さらには、地元における少子化とも関連していることがわかる。

Oさんの語りから：

聞き手：皆さん、学生になって、いったん町を出られますよね。そのあと、いろんないきさつがあつて、また町に戻られて、そのときにはいろんな葛藤があるみたいですね。必ずしも町が好きだから戻ってくるというわけではないようですね。

Oさん：そう思っている人は少ないんじゃないですか。祭りが好きだったら、祭りのときだけ帰ってくる。家が商売をしているから跡を継がないといけないという人もいる。ボクらの世代は、帰ってくるように親が子どもを洗脳する。うちもあそこで洋服屋をしていたんです。ショッピングセンターがあるときに、土地を持っていて、あそこに店を出すから帰ってきてほしい。もともと仲が良くなかったけど、新しい店を出すなら仕方ないかということで帰ってきたんです。それが平成元年だったかな。・・・中略・・・ところが、一昨年、オヤジが死んで、誰かが自治会長をしないとイケないので、たまたま体が空いていたから、それならオレがするということでやっています。

聞き手：Oさんたちの世代は、家業を継ぐために戻ってこられたけども、次の世代がなかなか戻ってくるのは厳しいのではないか。今、商売をされているところでも、後継ぎの方がおられないところは、いまの代が終わったらどうなるんだろう・・・

Oさん：ないところが多いと思うし、篠山の人口、景気では、跡を継がしてまでやらそうというところはほとんどないと思います。自分がしんどかったのがわかっているからね。だから、いまの世代に限らず、いまの30代ぐらいでもほとんど出ていっているからね。

聞き手：皆さん、教育に力を入れているので、子どもさん、みんな、大学に行っているのだから、大学に行くときに出ていくし、大学を卒業して、いろんな仕事に就かれるし、余程でなければこちらに帰ってこないですよ。

聞き手： そんななかで、この春日神社のお祭りを、どういうふうに続けていくか、大きな課題ですよね。

Oさん： 結局、人とお金ですよ。今はなんともないけども、鉾山でも、ちょっと潰れて修理をしようと思うと、何百万、へたすると何千万単位になる。そんな金が出せるかという、出せない。そしたら、飾っておくだけしか仕方がない。下二階町の、棒が一本折れただけでも50万だからね。何年か前に、河原町のほうでタイヤが潰れたことがあって、それが2,300万だと。だから、どこまで直せてというのものもあるし、人の問題、年寄りの問題、いろいろね。まず最初になくなるとしたら、太鼓がなくなるんやろうなあと。鉾山は神事として、やっぱりね。太鼓に関しては、なんとも・・・

Kさんの語りから：

Kさん： 上二階町は観光客向けの町。ただし外部の資本が入ってきていない。それは、篠山は外部資本を投入するだけの価値のない町である。・・・中略・・・90年代は篠山の地元産業はあまり良くなく、地元就職しようと思っても、雇用そのものがなかった。10年くらい前の自分はというと、宵宮は無理だが、本宮の時には鉾山の行列に参加し、夜になると太鼓みこしに参加していた。大阪にいた時も、祭りのときは、何かと融通をつけて篠山に戻って来て、祭りに参加していた。今はそうした融通をつけて戻って来る人達が減ってしまった。

YFさんの語りから：

聞き手： ずうっと何十年、祭りに関わってこられて、しかも大きな役もやってきて、これからはどうですか？ 祭りがずうっと続いていくために、何か続けていくことができる仕組みづくりはどうでしょう。

YFさん： それをね、ずうっと考えているんですけどもね・・・ 本当はまちづくり協議会が・・・ 最初、ボクがまちづくり協議会を作ろうと言って・・・、思ってたのが、祭りを9町だけじゃなくて、全部ひっくるめて、太鼓神輿や、鉾山や、言わなくて、すべての子どもたちにもね・・・、子どもたちの問題から言うとね、参加をしてほしいと。じゃあ、それをだれがそれを調整する・・・、いまの場合は、各町々でお願いをして、集めていただいているというのが現状ですけども、それが、全体としてできないものかなあという・・・、ふうには思っていたんですけども、なかなかすぐにはできませんけどね。

今の50代、60代の自営業主の方々は、家業を継ぐために地元に戻ってこられた。しかし、その子どもさんたちについて、親御さんたちは、いずれ地元に戻ってきて家業を継いでほしいとは望んでおられないようである。子どもさんが全部、女のお子さんであったり、男のお子さんの場合も、大学進学や、なかには、中高一貫校へ進学したりした折に地元を離れて、大学卒業後に東京など都会で、いわゆる一流企業等に就職している場合が少なくない。総じて、自営業が衰退している中で、子どもたちに、現在の仕事を辞めてまで、家業を継いでほしいと言える状況にはない。

また、地元には、大卒の若者が働きたいと思える企業が限られているのも実態である。

地元を離れても、大学生の場合、休みをやりくりして、祭りの日に帰ってくる。しかし、社会

人になると、東京方面からでは、土日に戻ってきても、日曜日の夕方4時、5時くらいに帰らないと、明るる日の仕事に差し支える。宵宮には参加しても、本宮の夕方の神輿を担ぐことができないのである。

また、結婚したり、仕事で責任ある立場になったりするにつれて、祭りだからと言って、だんだんと帰ってこなくなるという。

地元の商いの衰退と人口減少は、祭りに要する資金確保でも苦しくなることが察知される。

春日神社の祭礼をどのように継承するかという問題については、祭礼だけの問題でないことは明かである。地域産業の存続・発展はいかに可能か、また、子どもが育つ町としての魅力をいかに高めるかなど、だれもが住みよい町としての魅力をいかに高めるか、というトータルな視点での検討が必要である。

当然ながら、このような検討は、春日神社に関わっている町だけでなんとかできる問題ではない。行政機関、まちづくりの中間支援組織はじめ、さまざまな立場の住民、のみならず、地域に関心のある市外の人々も巻き込んだ議論が必要なのであろう。

参考文献

- 天野郁夫編, 1991, 『学歴主義の社会史—丹波篠山にみる近代教育と生活世界—』有信堂。
- 有末賢, 1983, 「都市祭礼の重層的構造：佃・月島の祭祀組織の事例研究」『社会学評論』33-4, 37-62。
- 深澤あかね, 2011, 「商業町における祭りの変遷—祭りの背後にある商業と生活に着目して—」『社会学年報』40, 87-97。
- 小松秀雄, 1995, 「生田祭の社会学的研究(2) —三宮地区の地域特性と祭りの実践方法—」『神戸女学院大学論集』41-1, 17-36。
- 野中亮, 2010, 「文化圏の視点による祭礼研究の可能性：堺市鳳だんじり祭りの事例から—」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』9, 301-311。
- 鈴木章生, 2011, 「都市祭礼の伝統と変容」『目白大学人文学研究』7, 97-115。
- 竹元秀樹, 2014, 『祭りと地方都市—都市コミュニティ論の再興』新曜社。
- 田中滋・吉田竜司, 2011, 「祭りのオーソプラクシー化と社会変動—曳山祭を事例として—」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』13, 167-204。

補足:本稿は、2017年度神戸学院大学研究助成(c)による、「地方都市の祭りと地域住民の関わりにみるローカル・コミュニティの実証研究—兵庫県篠山市・黒岡春日神社の祭りを事例として—」の研究成果の一部である。